

伝記に見られるチャイタニヤ (Caitanya 1486-1533) の思想

橋 本 泰 元

I. 本稿は、1986年夏、北インドのブラジュ Braj (<Skt. Vraja) 地方 [Mathurā とそれに隣接する Vṛndāban を中心とした地域] において、集団巡礼に参加し調査した成果の一部をなすものである。

Braj 地方は、ヴィシュヌ派の聖典 *Bhagavata Purāṇa* (以下 [Bh. P.] と略記) に描かれた、ヴィシュヌ神の化身クリシュナが降誕し、さまざまな遊戯 *līlā* を行なった神話の舞台であり、15・16世紀以来、そのクリシュナ神信仰の中心地である。この地方の巡礼は、一般に「ブラジュ84里巡礼」Braj Caurāsi Kos (≒3.2km) *kī Yātrā*, 特に「[クリシュナ神が住す] 森の巡礼」Śrī Van Yātrā と呼ばれている。筆者が参加してきた巡礼団は、Caitanya 派のこの地方の中心寺院ラーダーラマン寺の輪番住職が、宗祖生誕 500 年祭を記念して主催し、約 200 名の信徒の参加を得て組織されたものであった。この巡礼団は 8 月 29 日に Vṛndāban を出発し、23 日間徒歩で全巡礼路を右回りに廻り、出発地に帰還した。

この巡礼を支える Caitanya 派の教義ないし世界観は、Caitanya の直弟子の Jiv Goswāmī が著わしたとされる教学綱要書 *Śrī Kṛṣṇa Sandarbha* の説である。それは、クリシュナ神の住する天上界 *Goloka* と、地上界 Braj は本質的に同じであり、この両者の一方は他方の再現 (*prakāśa-viśeṣa*) に他ならない；地上界においてクリシュナは顕現 (*prakāṣa*) した、すなわち人間の感官によって捉えられる形態で遊戯を示現している¹⁾、と説く。

ここでは、このような弟子たちによって整備される以前の、Caitanya 自身の思想はどのようなものであったかを検討するのが課題である。

II. Caitanya 自身は著作を残さなかったとされているが、宗派内には *Śikṣā-ṣṭaka* (『教えの八句』) が伝わっている。内容を概観すると、第 1 句ではクリシュナ神の名を称えることの賛美、第 3 句はクリシュナ神を賛えるべき信仰者の姿勢、第 5 句以後では、Caitanya は牛飼いクリシュナが最も愛したと神話が描く牛飼い女ラーダーの立場に自分を置きかえ、愛しきクリシュナへのバクティ (帰依・信愛) の歓び、クリシュナとの別離の哀しみを歌い、最後の句では Caitanya

(84) 伝記に見られるチャイタニヤ (Caitanya 1486-1533) の思想 (橋 本)

は、ラーダーになりきってクリシュナへの愛情を詠んでいる。ここではこの詩句を Caitanya の思想の源初的な形態を示すものと理解しておくが、この詩句からだけでは、Caitanya が具体的にどのような思想を持っていたかは解明できない。そこで宗派内での伝承の歴史が比較的確かである、Caitanya の生涯を描いた伝記に、その糸口を求める。

Caitanya 派の宗派内の伝承とのちの外部の研究と評価を考慮し統合すると、Caitanya の孫弟子にあたるクリシュナダース・カヴィラージ (Kṛṣṇadās Kavirāj 1531頃生) が当時のベンガル語で著わした *Caitanya Caritāmṛta* (『チャイタニヤ行状伝』, 1611頃, 以下 [CCA] と略記)²⁾が、最も信憑性の高い伝記のようである。これは、1573年頃に Vṛndābandās が著わした伝記 *Caitanya Bhāgavata* の足りない部分を補いつつ、Caitanya の全生涯を網羅するとの意図を明記している。さらに [CCA] の著者は、Vṛndāban で師の教えを整備すべく努めていた直弟子たちから教えの秘奥を受け、また直弟子のひとりが書きとめた備忘録を参照したと明記している。これらの点から、やはりこの [CCA] が、Caitanya の思想を知る上で最有力の資料と言えよう。ただし、前代の伝記同様、[CCA] においても Caitanya の神格化はますます進み、教学者たちの説を Caitanya の生涯に織り込もうとする意図が明白な箇所が多くなり、著者は Caitanya をクリシュナ神の模範的な帰依者、ないし教学者として描こうとしている。

このような [CCA] のもつ資料としての有効性と限界、および *Śikṣaṣṭaka* の中の Caitanya の考え方を念頭に置きながら、Caitanya の思想と弟子たちの教説を分別して見る視点を保ってこの伝記を検討すると、次の3点に気づく。第1点は、Caitanya が自己の思想を他者に語るときに、他者の意見を先ず聞いてからその説の誤謬を指摘し、徐々に自説を展開するという姿勢をとっている場合が多いことである。第2点は、伝記の著者は、複雑な理論や哲学を描く箇所では、Caitanya の弟子たち、すなわち著者自身の師匠たちの説を根拠として援用していることである。最重要な第3点は、同一の出来事・主題が2・3度繰り返されていることである。[CCA] の主な構成は、少年時代から24歳で出家遊行僧となるまでを扱う第1巻 (17章)、6年間にわたる諸国巡歴で自己の思想を形成していった模様を描く第2巻 (25章)、Jagannāth Purī に定住後から晩年までを扱う第3巻 (20章) となっている。しかし、繰り返し描かれている出来事・主題は、この章立ての枠を超えて配されている。この事態は、この伝記が著わされた時期の宗派にとって、この出来事・主題が非常に重要な意味を持っていたことを示唆す

るものであろう。

III. 上述の3つの視点から〔CCA〕全体を見ると、Caitanya 自身の思想と推測できるのは、Kāśī (Vārāṇasī) での Māyāvādī (幻影主義的不二一元論者) たちとの討論の中で示されたものであろう。この討論は、〔CCA〕に依れば、Caitanya が24歳で出家遊行僧となり、故郷のベンガルを後にして Jagannāth Purī を拠点に定めた後、南・西インドの2年間に亘る大巡礼をしたが、その後の Vṛndāban への巡礼の途上、およそ1515—1516年頃に Kāśī に立ち寄った時の出来事である。

この出来事は、構成上からすれば、本来は伝記の第2巻に全て納められるべき事項であるが、詳細な内容は第1巻7章に描かれている。おそらく当時の思想界の主流をなしていたと思われる Śaṅkara 説に対して自己の立場を明確にすることが、新しい宗教運動を展開し指導しようとしていた Caitanya にとって不可避であったと考えられるが、この事を反映してこの伝記でも重要と見なされ第1巻に納められたと言えよう。

この討論は、Kāśī に逗留中の Caitanya に対して、Prakāśānanda Sarasvatī を長とする出家遊行僧たちの非難があまりに激しく、Caitanya の弟子が耐えられなくなり、討論集会に出席するよう Caitanya に懇請したため、Caitanya 自らがその集会に赴き始まった。

A. 幻影主義的不二一元論を信奉する出家遊行僧たちは、Caitanya を出家遊行僧の本分を弁えず、信徒たちを引き連れて歌い踊る風狂者と非難する。これに対して Caitanya は、その理由を自分の師匠 (Īśvara Purī?) の教えとして次のように答える；「クリシュナ神の御名 (Kṛṣṇa nāma) は偉大なマントラであり、このマントラの力によって、唱える (kīrtana) 者の心中に、クリシュナ神への愛情 (prema) が湧き起こり、人は狂ったように歌い踊り出す。このクリシュナ神への愛情を捧げること (bhakti) が、従来の規範が説く人生の最終目標、すなわち解脱を超えるものである。解脱より生ずる喜びは、クリシュナ神への愛情から生ずる歓喜の海の一滴にすぎない。」この典拠に師の教えとして、Caitanya は同じ内容の詩句 [Bh. P.] 11-2-40 を引用している。

B. 次に幻影論者たちは、なぜヴェーダーンタの説 [Śaṅkara の *Brahmasūtra Bhāṣya*] を聴こうとしないのかと、Caitanya に質問を発する。これに対して Caitanya は、*Vedāntasūtra* [= *Brahmasūtra*] はナーラーヤナ神が述作者ヴィヤーサに説いた誤謬のない神の言葉であり、この第一義的解釈こそが最重要であるが、Śaṅkara はその第二義的解釈を行なっていて、その説を学ぶことで人間の

(86) 伝記に見られるチャイタニヤ (Caitanya 1486-1533) の思想 (橋 本)

最大の義務であるバクティが損われてしまう、と応えた。

Caitanya は *Vedantasātra* 所説の第一義解釈を次のように展開する。

① 「ブラフマン」という語の第一義は最高神 Bhagavān であり、最高神は知的力能 cidaiśvarya [伝記中の他所の用語では *cit · śakti, svarūpa · śakti*] に満ち無双至高である。最高神の力の発現態である身体 *vibhūti · deha* はすべて知的形相 *cidākāra* である。Śāṅkara は、この知的力能 *cid · vibhūti* を覆い隠しブラフマンを無形相 *nirākāra* と説いている。

最高神の居所 *sthāna*, 眷属 *parivāra* も知・歓喜 *cidānanda* より成るものであるが、Śāṅkara はそれをプラクリティの純質の変化と説いている。これ以上のヴィシュヌ神に対する非謗はない。

② 最高神と個我の関係は、力をもつもの *śaktimān* と力 *śakti* の関係であり、この論拠は *Bhagavadgītā* 7-5 「[クリシュナがもつ] ジーヴァとして存在する優位のプラクリティ (特性)」と、*Viṣṇu Purāṇa* 6-7-61 「ヴィシュヌ神の3種の力、すなわち *parā · śakti* [*antarāṅgā/svarūpa · śakti*: 最高神の本質をなし、超越的な活動 *līlā* の世界全体の基体], *avidyā karma · śakti* [= *bahiraṅgā/māyā · śakti*: 最高神に外面的に関係する、物質世界の資料因], *kṣetrajñā · śakti* [= *taṭasthā/jīva · śakti*: 知的・非知的世界の中間に位置し両方の世界に関係し個我を形成する]」である。

③ *Vedantasātra* の中に作者ヴィヤーサは開展説 *Pariṇāmavāda* を説いた。しかし Śāṅkara は、このヴィヤーサ説を誤解し、仮現説 *Vivartavāda* を樹立した。

最高神は、人間の思惟や論理を超える不可思議な力 *avicintya · śakti* を持っていて、自己の意欲によって現象世界として開展する。それでも最高神は自己の不可思議な力の作用によって変化するものではない。これは物質世界における如意宝珠とその働きに喩えられる。

④ *Praṇava* [聖音 *Om*] が大聖句 *Mahāvākya* であり、ヴェーダの根本である。それはまた、神の本性であり全世界の基体である。*praṇava* は、全ての拠り所である神を示すものである。*Tattvamasi* という文はヴェーダの一部分 *ekadeśa* にすぎない。

すべてのヴェーダやスートラは直接的意味 *abhidhāna* としてクリシュナ神を説明しているが、Śāṅkara は主要義を捨てて、間接的意味 *lakṣṇā* を解釈している。

C. 上記のように Caitanya は幻影論者たちに自説を展開した最後に、最高神を獲得する方法として次のように述べる；「クリシュナ神の名・神話の聴聞などの手段としてのバクティ *sādhana*・*bhakti* が、全てのヴェーダの意図するところである。このバクティの遂行によって個我の心に、クリシュナ神への愛着 *rāga*、愛情 *prema* が生じ、クリシュナ神への甘美な恋愛感情 *mādhurya*・*rasa* を味わうことができる。愛情を捧げ帰依すること *premā*・*bhakti* によって、クリシュナはその帰依者の望みのままになり、帰依者はクリシュナ神への奉仕の喜びを得ることができる。」

ここでは *sādhana*・*bhakti* の支分が説かれていないが、他の箇所 ([CCA] 2-22-60~75) にクリシュナ神の徳性・遊戯・名称の聴聞 *śravaṇa*, 称賛 *kīrtana*, 念想 *smaraṇa*, 礼拝供養 *pūjā*, 聖地に住むことが、重要な実践手段と説かれている。

ここで再び問題となるのは、最高神と個我の関係である。この討論の中では、両者の関係は上述の B. の②で示唆されているのみである。[CCA] の他所の所説を総合してみると、個我を形成する *jīva*・*śakti* は、最高神の本性の構成要素でもなく、物質世界の質料因である *bahirāṅgā*・*śakti* に属するものでもない、この両方に関係するので *taṭasthā* と呼ばれる；この *taṭasthā* が占める特異な位置によって、個我は超越の世界で最高神に奉仕し最高神と共に住すか、あるいは *māyā* によって支配される物質世界に住すかの選択の余地がある。このように個我は本質的には、最高神と別異であり、輪廻世界からの救済は、自らの神へのバクティによって神と共に住すことにある。

D. 以上のように、構成・主題の特徴から [CCA] を分析し、伝記作者の補足が少ないと考えられた部分を取り出し、そこに Caitanya 自身の思想を読み取る試みを行なった。取り出した部分は幻影論者たちとの討論であり、ここでの Caitanya の Śāṅkara 説批判は、聖典を忠実に解釈していない；絶対者に力能を認めていない；知識による解脱は神に愛情を捧げ共に住すことと相反する；これら3点に専ら向けられていた。新たな宗教運動を展開しようとしていた Caitanya にとって、聖典の所説をそのまま受けとめ実践することが急要で、複雑な思弁は急務ではなかったに違いない。

1) De, Sushil Kumar : *The Early History of the Vaisnava Faith and Movement in Bengal*. Calcutta, 1961. pp.336-7. 2) 使用テキストは Śrī Śyāmdās (ed. & Hindī Comment.): *Śrī Śrī Caitanya Caritamṛta*, Vṛndāban, 1965.
<キーワード> Caitanya, Biography, Bhakti